

松江歴史館の魅力

松江歴史館専門官

六道正年（高校十八期）

はじめに

江戸時代初め、堀尾氏により松江の地に城下町が建設され、開府四百年を迎えました。松江の歴史を現代に伝える武具甲冑や古文書、絵図、民具などの歴史資料は、先人の暮らしぶりや知恵を知ることが出来るかけがえのない宝です。

しかし、これまで近世の松江を調査研究し、展示する施設がありませんでした。そこで、貴重な歴史資料をきちんと保存し、市民や観光客のみなさんが松江の歴史や文化に親しんでいただくための施設を整備しました。郷土の歴史を楽しく学び、これからの松江のまちづくりを共に考えていく拠点、それが松江歴史館です。

松江歴史館の立地条件と外観

松江歴史館は松江城に隣接し、江戸時代には松江藩家老乙部家（初代の九郎兵衛可正は藩主松平直政を早くから支え、直政が絶大な信頼を寄せた）の屋敷があつた、いうなれば一等地です。

北西の隅には左義長の絵をもとに2階建て

の櫓を配しました。入口を入りますと、樹齢百年の立派な松が迎えてくれます。この松は、東朝日町の片倉製糸にあつたものです。

玄関・松江藩家老朝日家長屋

敷地南の道路沿いにあるのは、乙部家に隣接した家老朝日家の長屋です。江戸時代末の姿に復元した建物で、イベント会場に使っています。二階が低いのが特徴です。

瓦は江戸時代から近年まで松江で使われて来た瓦様式「左棧いぶし瓦」を使用しています。左棧とは、屋根の頂上部である棟から見下ろして左側が盛り上がった、「逆へ」の字型の瓦です。いぶし瓦とは、焼く過程で釉薬を使わずに、燻煙により表面を炭素膜で被った瓦のことです。

松江歴史館は畳敷きです。玄関は一四七畳、松江城天守閣が見事に望めます。松江歴史館はまさに「お城の見える博物館」です。玄関で皆様を迎えるのは松江藩の御用絵師、

陶山勝寂が明治七年に描いたとされる「松江四季眺望図」です。堀尾吉晴・忠氏父子が城地選定を行なった床几山辺りから鳥瞰した松江城下を描いたもので、手前の雑賀町は春、その北の白瀉は夏、橋北は秋、遠景の山々は冬と四季を描き分けています。大橋川が浅いのが印象的です。

展示してある甲冑の兜の正面には松江藩の

合印であるスピード型の「猪の目」を配しています。猪は猪突猛進、後へ退かない心意気を示しています。

日本庭園・工芸菓子と喫茶コーナー

玄関から進んで行くと、ガラスケースの中に「瑞翔」と命名された工芸菓자에眼を奪われます。右奥にある椿の花とともにすべて和菓子で出来ているとわかると、驚嘆の声を発する方がほとんどです。喫茶コーナー「きはる」で実演されている現代の名工・伊丹二夫氏の作品です。

歴史の指南所（研修室）向かいの三十畳の大広間の前には、雲州の日本庭園が広がり、その向こうに天守閣が望めます。庭園の特徴として、枯山水で水を使わずに砂や石で風景を表わしていること、景色の中心となる正真木に黒松を配していること、飛び石が他地域に比べて地面から高く据えられていることなどがあげられます。珠光型燈籠やその横の手水鉢は、七代藩主松平治郷（不昧）の奥方の輿入れにまつわるものです。

伝利休茶室

歴史館の奥まった所には、松江に残る最古と言われる茶室を復元しました。かつて松江

藩筆頭家老の大橋家に伝来し、その後は穴道町の木幡家に移築された四百年余の歴史を持つ三帖台目の茶室です。

この茶室の由来は諸説あります。一つは、もともと千利休が所持しており、それを門人の堀尾但馬（堀尾吉晴の従兄弟）に譲り、のちに大橋家に渡ったというもの。もう一つは、安芸広島藩主福島正則が利休の指導のもとに建て、それを当時正則の家来だった大橋茂右衛門がもらったというもの。

明治元年に大橋家から木幡家に移され、その後、解体されたものの、幸いにして、部材と明治の立体図が保存されていましたので復元できました。

福島正則が加藤清正を招いた時、清正の長刀が刀掛けに納まらず、やむなく壁に穴をあけたという逸話が残る茶室です

基本展示室

展示室は常設展を行っている基本展示室と、特別展を行う企画展示室の二室があります。本日は基本展示室の展示の中からいくつかご紹介します。

幕末の松江城下の模型を展示しています。

内濠、外濠のみならず、中濠まで築いて三重の備えで敵を防ごうとしたのでした。内中原町の県立図書館・武道館・職員会館の西側は

今は道路になっていますが、江戸時代には南の京橋川へ流れ込む中濠でした。

鉤型路や丁字路が無数にある道路網、筋違

いに架けた筋違橋、出撃する軍勢が集結したり、侵入した敵を迎え撃つ備えも施した勢溜など、実戦を意識した町づくりを堀尾吉晴はしました。こうした街並みが四百年後の今もあまり変わっていないところが松江の大きな特徴です。

十八世紀に入ると米価の下落、たび重なる天災などにより、全国的に藩財政が逼迫します。松江藩では徹底した経費節減と殖産興業により財政再建に成功します。例えば蠶を生産し、それは大坂の蠶問屋に運ばれて蠶燭に加工されて全国へ売り出され、収益が藩財政を潤しました。御種人參、鉄、木綿などがもたらす利益は計り知れないものがありました。そのように藩外へ売り出されて利益をもたらした商品や、いわば「外貨」を稼いで藩財政再建に貢献した産業を相撲に見立てた番付が作られています。雲陽国益鑑とよばれるものです。

この中には私たちの郷里大社に関わるものがたくさん出てきます。頭取として特別な扱いは大社祈祷参物（出雲大社参詣の際の祈祷料や賽銭などの収益）、そのほか、大社檀所配

札（出雲大社の布教活動をする御師を派遣する檀所が配るお札の売上）、杵築宿料、杵築の富くじ、日御崎の参物、杵築遊所、杵築の干

し鯉（長崎を経由して中国へ輸出された）、宇龍問屋（日本海を航行する北前船は宇龍や鷺浦に寄港した）・・・大社の産業が豊かであった証でしょう。

松江歴史館には一辺3m、深さ2mのガラ又張りの四角い穴があります。歴史館敷地の地下遺構です。ガラスの上に乗るのはちよつと怖いのですがスリル満点です。

ここでは歴史館建設の際の発掘調査で見つかった家老屋敷跡を再現しています。四方の壁面に発掘調査ではぎ取った家老屋敷跡の土層そのものを貼りつけ、床面には、堀尾、京極、松平氏の各時期の面の土に建物の土台石となる礎石を据えています。

この穴を覗くと、軟弱なために沈下しやすかった地盤を補強するために、何回も盛り土をしてきた先人の苦勞がしのばれ、江戸時代に瞬時に移動できましよう。

駆け足で松江歴史館の魅力をご紹介しました。松江歴史館で過ごされれば、わが町が誇らしく見え、至福の時を過ごしていただけのことでしょう。御来館をお待ちしています。

（多くの展示物を紹介説明いただきましたが、紙面の都合上、三項目をとりあげました。ご了承ください。）



本稿ならびに看板作製にあたっては松江歴史館から多大なご協力をいただきました。記して謝意を表します。

（文責・引野律子[^]高校二十期^v）